なまりや、少年時代の思い出話に花が咲く。
うらやましいことである。
東京人同士が金沢の居酒屋で隣合わせた場合、話に花が咲いたりなどしない。たぶん草も生えやしない。
「へえ、おタクも東京ですか」
「どのあたりですか」
「葛飾区の金町」
「ボクは杉並区の成田東っていうところです」
「行ったことないなあ」
「ボクも京浜東北線より東の方へは足踏み入れたことないですね、なーんか行く気しなくて」
「だろうね、おいらたちも新宿の向こう側なんか地の果てだって思ってるから」
これでおしまい。
話を新宿に絞っても、まだ噛み合わない。
「後楽園アドホックの近所に『ダグ』って店があってそれが高校時代の溜り場。それと三光町の交差点の周辺あたりは大学生の頃にサークルのコンパとかで」
「ふん、新宿ねえ。あそこは、私にとっちゃ映画観に行くか本買うかってぐらいのとこでね。やっぱり呑んだり遊んだりの拠点は上野浅草から錦糸町界隈になりまさあね、どうしたって」
結局、東京人の東京知識は、石川県人が金沢の繁華街に対して持っている、それこそホクロの数まで知っているような詳しさには到底及ばない。
高校の数ひとつ取ったって千からある。だから地方出身者同士の会話では、まず一時間はもつ話題である出身校の話が、全然噛み合わない。
「日本学園なんですよ、ボクは」
「へー、聞いたことないな。わたしゃ京北」
「ケーホク? どういう字書くの?」
というわけで、一応同郷ということではありながらも、彼らの会話は次第にケンカじみて行く。
「ウチの方じゃミナゴロシが幅きかせてたなあ」
「はっ、そんなの全然コケだったねえ、ウチの方じゃ。なんたってスペクターがバイク二〇〇台に四輪一五〇台から連ねて暴れてたからね、甲州街道じゃ」
「そっかなあ、甲州街道あたり肩イカらしてカッ飛ばしてたのは相模のイモばっかだったんじゃなかったっけ? 『動く』を『いどく』とか言っちゃうさ」
「それ言うんなら、錦糸町くんだりでやれミナゴロシでございだなんて言ってぶいぶい言わせてたのは、みーんなチバの貝掘り坊主だったって話だぜ」
「おいおい、ニッポン学園だかなんだか知んないけど、杉並のトッポい詰め衿坊主が、一丁前のゾク面ひけらかすだなんて見られた図じゃねえぜ」
「上等じゃねえか、そっちこそどーせ帝京かシカンあたりにフクロにされちゃ東武デパートの便所かなんかでピーピー泣いてたクチだろうがよ」
「ぁんだあー、もう一遍言ってみろ、このタコが!」
私は何を言っているのだろう。
つまりだ。
我々東京のガキたちには、せいぜいお国なまりとしてゾク言葉があるぐらいなもので、共通の体験や、独自の味や、懐かしい祭の記憶が欠けているのだ。
「群盲象を撫でる」
そう。巨大な鯨の背中に寄生しているフジツボみたいな存在である我々東京人は、ちっぽけな覗き窓から、それぞれに東京の一部分を見るのが精いっぱいだ。
故郷と呼べる範囲は、せいぜい半径五キロだ。そこから先は視界が霞んで、よく分からない。
淋しい話だ。

それでも自分の町を愛している

さて、田端について触れよう。
この町は、昔から北区では最も教育水準の高い地域として有名だった。私が中学生だった頃も、北区にある二十六校の中学校が一斉に行う業者テストにおいて、最も優れた成績を残すのは常に田端の学校だった。
一方、私の通っていた岩淵中学校は、二十六位の座に座ったまま、決して立ち上がろうとしなかった。
ガラも悪かった。学校の隣にスーパーのダイエーができた時には、学年の生徒数の四分の一に当たる三十数人の中学二年生が万引で一斉補導された。
二年生の時には、隣の赤羽中学との間で、決闘騒ぎがあった。この時は応援見物も含めて五十人以上が荒川の河原に集結した。結局、全員が警察の護送車に乗せられて、叱責を浴びておしまいだったが、この時護送車に乗らなかった者(私は家でマンガを観ていた)は、皆、非常に肩身の狭い思いを味わった。
そういう校風だったのだ。
田端は全然違っていた。
北区の中で最も文京区に近いからなのか、成績の方も品行の方も、文京区に近く、つまりは優秀だった。
聞くところによると、現在でも、この田端優秀傾向は変っていないそうだ。
田端は、その昔、芥川龍之介をはじめとする文人が多く住んだ町だ。
そんなこんなで、田端の人々は自分たちの町を「田端文士村」と呼んだりして誇りを持って生きているのだそうだ。
赤羽では、つい数日前、わが母校、岩淵中学校の女生徒が、アパートの隣の部屋に住んでいる男に包丁でメッタ刺しにされて死亡するという事件があった。
赤羽署管内では、私が知っている限りでも、この一年の間に三件の殺人が起きている。
「赤羽殺人村」か。ふん、シャレにもなりやしない。
しかし、それでも、私は自分の町を愛している。
なぜかって?
愛情に理由なんかいらないよ。

YAMANOTESEN
田端
HIZAKURIGE

山手線膝栗毛

【第26回】

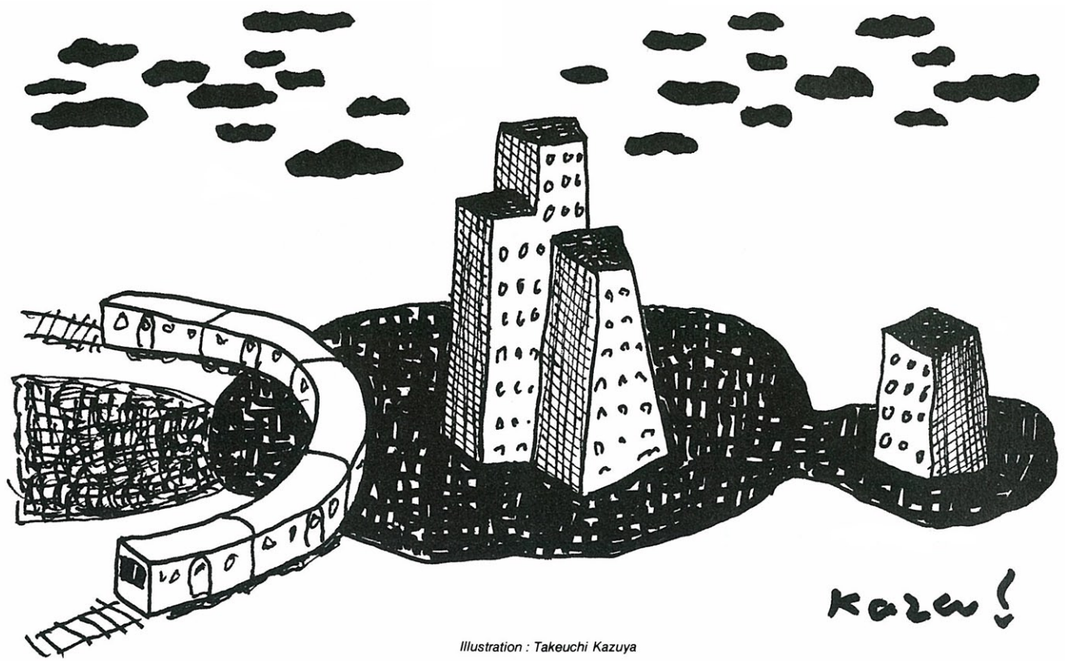

Illustration : Takeuchi Kazuya

田端

テクニカルライター
小田嶋 隆

東京人の淋しい話

田端は東京都の北区にある。
「それがどうしたんだ」
と思う向きもあるだろうが、私は北区に生まれ育った人間なので、やはり一応はそういうことに触れておきたいのだ。
で、ついでに言うと、田端駅は、山手線の中で、唯一北区に属している駅でもある。
「だからそれがどうしたんだよ」
うるせえな。どうだっていいじゃねえか。
とにかく私は、この場を借りて「北区にも山手線は通っている」ということを言っておきたいのだ。
私の中では、自分が東京都民であるという自覚よりも、北区民であるという自覚の方がはるかに大きい。だから北区のことについては比較的些細なことにでも拘泥するのである。
たとえばの話、もしも神奈川県立軍が品川区に兵隊を差し向けてきても、私はたいして気にもとめないだろうし、もちろん兵隊に行く気持ちになんかならない。
が、もしも板橋区の前野町あたりが赤羽に攻めこんで来たら私は許さない。断固としてこれを阻止する。
かように、郷土意識というのは、そんなに広い場所を囲いこめるものではないのである。
特に東京みたいな肥大散漫情報過多の大都市においては、人々の郷土愛は、ごくごく狭い町内レベルしか力バーし切れない。
これがたとえば石川県みたいな、人口も情報も少ない地方の小県なら、県民は自分の県の成り立ちやありようをかなりの程度把握することができるし、地元民の連帯意識も東京人同士のそれよりは強いはずだ。
だから、石川県出身者が、たとえば四谷のスナックの止まり木で、偶然隣合わせたりすると、郷土料理やお国